

# 寺院縁起の成立と在地の情勢

——江州浅井郡大吉寺の放生会と「大吉寺縁起」——

橋 本 章

## 一、はじめに

滋賀県の湖北地方、東浅井郡浅井町大字野瀬の地にある寂寥山大吉寺は、平安時代初期の創建を伝えられる天台宗の古刹である。現在では本堂や山門の他、わずかな建物が山中にひっそりと建つのみなのだが、かつては現在の寺域の背後にそびえる天吉寺山山を中心、「高山能構五十坊之所候<sup>①</sup>」と称される程の繁栄を極めていたと伝えられている。

この大吉寺の歴史を今に伝えるものとしては、山上の遺構の他に、わずかばかりの古文書の類が現在の大吉寺や麓の野瀬の集落の人々が結成する保存会によって保管されているのみとなっている。本報告では、これら現存する古文書の中から、「大吉寺縁起」と呼ばれる成立年代未詳の文書について、その史料の記述された背景などにも目を配りながら、若干の考察を行ってみたいものと思う。

## 二、大吉寺沿革と放生会を中心に

さて、「大吉寺縁起」を取り扱う前に、先ず本項では大吉寺の沿革について、残された史料や伝承等からその概

要について見てゆこうと思う。なお、ここでは大吉寺の存立基盤とも言うべき放生会の様子を中心に、その変遷の過程を大枠で押さえるに留め、大吉寺の歴史的展開については、「大吉寺縁起」などの文書を用いて検討する次に譲りたい。

大吉寺へは野瀬の集落から東側にそびえる天吉寺山（標高七五〇メートル）へ、大吉寺川沿いの谷筋を上流に小一時間程登ると到達する。その開創は貞観七年（八六五）とも伝えられ、かつては天吉寺山の山頂近くに数多くの僧房を持つ大寺院であった事が、伝存する数点の古文書などよりうかがい知れる。また昭和九年（一九三四）の調査報告書によって、本堂や経堂、鍾樓などの跡と思われる四棟の建物の遺構や子院が建てられていたらしき場所も確認されている。

現在の大吉寺は、寺跡からはやや下った天吉寺山の中腹付近にあり、本堂と山門、そして庫裡と宿坊だけが森の中にひっそりと建つのみで、往古の面影を偲ばせるものは残されていない。訪れる者も少ないこの寺の維持管理については、住職と前の住職、そして野瀬の集落を中心とする信徒組織によってなされている。

この信徒組織の中心的な役割を果たすのは八名の信徒総代で、彼等は必ず野瀬の集落の中から選ばれている。総代の任期は四年間で、任期ごとに半分の四人づつが、集落の合意にもとづいて野瀬の区長の指名という形で改選されてゆく。この信徒総代の八名が、例年九月十五日に大吉寺で執り行われる「放生会」の頭役差定について重要な役割を果たすのである。

大吉寺の放生会は、別に「虫供養」とも呼称され、野瀬を含む旧上草野村の九カ字（高山・寺師・西村・草野・太田・郷野・鍛冶屋・岡谷、そして野瀬）の中から一名の頭人を差定し、寺に対しての勤仕を求めるといふ頭屋制の行事である。放生会に関わる頭役差定については、慶長十三年（一六〇八）から明治四十年（一九〇七）までのおよそ三百年にわたる頭人の名前とその出身村、頭役差定を行った時の使節の名前、そして所々に頭人が納めた料

物の内容や額などを記した『御行帳』なる文書が信徒組織の申し送りで伝えられており、<sup>③</sup> 差定圏等に関してある程度の追跡調査が可能となっている。

『御行帳』によると、頭人は毎年必ず差定されており、記載開始から終了に至るまでの間に断絶等の箇所は一切見られない。そして何よりもこの文獻が明示する興味深い事項は、記載された三百年間の頭役が、現在の差定圏である旧上草野村とは全く別の地域に差定されていた事である。

『御行帳』に見られる大吉寺放生会の頭役差定範囲は、明治の旧行政村では田根村と呼ばれた地域のうち、高畑、野田、池奥、北野、黒部、力丸、竜安寺、瓜生、谷口、上野、小室、木尾の十二カ村<sup>④</sup>（ただし田川・須賀谷の二字はこれに含まれていない<sup>⑤</sup>）と、同じく旧湯田村に属した八嶋・大依の二カ村である。そしてこの差定圏は、旧田根村の高畑に鎮座する波久奴神社（萩野神社）の氏子祭祀圏と合致するのである。<sup>⑥</sup>

この波久奴神社については、『興福寺官務牒疏』の「波久奴神」の中に「在田根郷。號萩野明神。祭所大物主神。大吉寺鎮守。社僧二人、神人七人」<sup>⑦</sup>との記録があり、またこれに関しては、明治初年の神仏分離令以前に波久奴神社の境内に神宮寺と呼ばれた密教系の寺院があったという伝承が地元に残されている。<sup>⑧</sup>

こうした事例は、田根村の前身である田根庄が大吉寺の支配域ではなかったかとの推測を生じさせるが、事実、文安四年（一四四七）七月十六日の「山門西塔院釋迦堂閉籠訴訟條目」の中には、「田根庄田地」が仁治年間（一二四〇～四三）以来「江州大吉寺領」であるにもかかわらず、畠山氏が文安元年（一四四四）より押領を続けている事が訴えられており、田根庄が大吉寺の支配下にあった事をうかがわせる。<sup>⑨</sup> またこれに関しては『久我家文書』に久我家がこの地の領家として、その維持に努めている様子が記録されており、<sup>⑩</sup> 支配権をめぐる当時の複雑な状況が推察される。

その後の大吉寺は織田信長の勢力による焼き打ちに遭い、全山焼亡の憂き目に曝されている。『信長公記』の元

龜三年（一五七二）の項には「（前略）草野之谷是又放火候、并二大吉寺と申して高山能構五十坊之所候、近里近郷百姓等當山へ取上候、前者嶮難のほり難きによつて麓を襲はせ、夜中より木下藤吉郎、丹羽五郎左衛門、うしろ山續きに攻上、一揆僧俗數多切捨」なる記述が見られる。そして大吉寺は近世期を迎えた段階で全ての寺領を喪失したらしく、享保十九年（一七三四）頃に成立したとされる寒川辰清の『近江輿地誌略』には、「寺領三千七百石ありしに、淺井三代の亂に焼失、是により寺領も失せ今纔に一寺と成て天台宗たり、寂寥山大吉寺と號す」と、記されている。つまり大吉寺は、『御行帳』に残る頭人の供奉によつて、辛うじてその命脈を現在まで保つてきたと考えられるのである。

さて、『御行帳』への頭人の記載は、明治四十年（一九〇七）を最後に無くなるのだが、それから大正六年（一九一七）までの九年間には、大吉寺の頭役が勤められていなかった事が郷土史家伏木貞三氏らの研究によつて示されている。<sup>(13)</sup>そして大正六年以降は、先にも述べた通り、旧上草野村の九カ字が現在までその差定圈として指定されるのである。

この変遷についての記録は、寺側村側のどちらにも残されていないのだが、伝承によると、明治四十二年（一九〇九）八月十四日、午後三時三〇分に発生した通称「虎姫地震」によつて東淺井郡一帯が壊滅的な打撃を受け、翌年より、その復興に専念するために放生会を中止したのだが、震災以降差定圈側では莫大な費用を必要とする放生会の頭役を受けるまでに復興する事が叶わず、田根村の村長が大吉寺の所在地である上草野村に対し、以後の頭役を引き受けてくれるよう依頼に行き、紆余曲折の末、現在の体制となったのだと言われている。

この頭役差定の中絶が、寺側と差定圈側のどちらの意志によつて決定されたのかは不明であるが、衰退の一途を辿つていたであろう大吉寺の状況を考えるならば、何らかの補助的機関の無い限り、大吉寺側にそうした権限は無かつたものと考えられる。

そしてこれ以降の放生会の行事は、それまで野瀬等の上草野村の集落が中心となつて、大吉寺で勤められてきた「虫供養」<sup>(5)</sup>の法要と合同で執り行われる事となつたようである。故に現在では、大吉寺の放生会のことを別に虫供養とも呼んでゐる。

ここで興味深いのは、野瀬の集落において組織される大吉寺の信徒総代が、放生会の起源の説明として、寺に伝わる「源頼朝御判物」を掲げている事である。この古文書は別名を「大吉寺虫供養文書」<sup>(6)</sup>とも呼ばれ、本来は虫供養に関するお布施を集める事を合法化させる効力を持つものである。この史料の詳細については後述するが、こうした文書が放生会の前面に提示されるという事は、差定圈の変化に対して何らかの意志の確認作業が必要視されたからであるとも考えられよう。一連の差定圈の変遷は、こと祭祀形態の変化にとどまらず、それぞれの村落社会の構成に対して、その意味を問ひ直す機会となつたものと思われる。

以上、大吉寺をめぐる歴史的な変遷過程について、その最大の法会である放生会の展開と、これに頭役の差定圈として携わる在地との関係性を中心に見ていった。大吉寺の放生会そのものの起源については定かではないのだが、少なくとも『御行帳』の記述の開始される慶長十三年の段階において、既に頭役差定のシステムが完成されていた事は自明であろう。問題はこうした放生会の維持が、如何なる勢力、または如何なる時代背景をもつて為されていたのか、という点に絞られるものと思われる。

では次に「大吉寺縁起」の成立について、大吉寺のおかれてきた種々の状況や頭役差定等の問題を視野に入れた検討を進めてみたい。

### 三、「大吉寺縁起」について

五来重によると、寺社縁起とはその開創を不思議な「縁」によつて神仏が発「起」出現する奇跡として語るもの

で、それ故に縁起の内容は時空を超え歴史を無視した形になり、その荒唐無稽さが縁起を実証的な研究の圏外に押し遣ったのだという。<sup>17)</sup>確かにこうした指摘は従前の寺社縁起に対する通念として在ったものと思われる。

縁起を研究対象として取り扱う場合について、桜井徳太郎は①宗教性と文学性、そして美術（芸術）性の三者がどのように縁起の中に絡みついているのか、②縁起はどういう実用的価値をもっていたのか、そして③縁起に含まれた虚妄の多い荒唐無稽性をどう処理するのか、という三つの検討課題を提示しているが、これらの三点は縁起の成立とその後の変遷過程を考えて行く上でも重要な問題となるものと思われる。そしてさらに桜井は縁起の展開について次の様な見通しを立てている。

一つの縁起が成立し伝承されて行く過程には、かならず変化の歴史が伴っている。改めて触れるまでもなく、時代が下るほど寺社の開創を遡らせて説こうとしたり、開基を古い時代の高僧や神話上の祭神にあてようとする作爲がはたらく。またその行実や靈驗性は、時代の下るほど潤色の度が加わり、いつそう神秘的となり怪異的となるところが少なくない。この神秘性や怪異化によってつくられた縁起の内容じたい、もちろん荒唐無稽であつて歴史的事実となしがたい。しかし、神秘化無稽化したいは歴史的真実であつて、われわれはそれを通して歴史を知ることができる。だから荒唐性のゆえに拒否するのは正しい態度ではなくて、むしろ次々と冠せられる被覆をはぎとりながら、原像に迫って行く努力を重ねながら、縁起伝説の歴史的变化を跡づける作業が重要な意味をもつてくるのである。<sup>18)</sup>

こうした見解は、縁起を題材とした研究を進める上においての大前提となるものと思われるが、本報告では、主に桜井の言う「歴史的真実」に着眼点を置きながら、「大吉寺縁起」を取り扱ってゆきたいと思う。

現在、大吉寺及び野瀬の保存会組織が保有する信長による焼亡以前の、言うなれば古大吉寺より伝来する文献類（以下大吉寺文書と称す）は、「大吉寺縁起」を含む十五点が残されているにすぎないのだが、このうち年号の記

載部分が欠落しているものは先にも述べた「大吉寺縁起」の一点のみであり、他の十四点の文献については、いずれも年月日の記述が見られる。さて、本報告に時期的に関連性を持つ十四点の文書は、年代順に次の通りである。

- (1)、源頼朝御判物その一（文治元年十一月一日）
- (2)、源頼朝御判物・大吉寺虫供養文書（文治三年七月七日）
- (3)、源頼朝御判物その二（文治三年十一月十三日）
- (4)、一切経安置祈願文（弘安八年五月日）
- (5)、大吉寺勸進状（暦應元年十月日）
- (6)、足利尊氏祈禱状（観應二年九月二日）
- (7)、足利義詮禁制（観應二年九月二日）
- (8)、足利尊氏感状（観應二年九月五日）
- (9)、足利義持御教書（應永廿五年十一月二日）
- (10)、大吉寺諷誦文（應永廿九年五月十日）
- (11)、足利義教祈禱状（永享八年四月九日）
- (12)、足利義政祈禱状（長禄三年十二月二日）
- (13)、足利義材祈禱状（延徳参年十一月廿日）
- (14)、大吉寺造営疏（享祿二年正月日）

このうち享祿二年正月の「大吉寺造営疏」については、その原本が大吉寺側には存在せず、『東浅井郡志』が明治十九年の史局採集の影写本より収録したものが伝わるのみとなっているが、天保十二年（一八四一）の『寺縁分限縁由等書上帳』にはその存在が確認されている事から、文書の内容自体は伝来されているものとして取り扱いた

い。

ただしこれら成立年代の特定できる文献類の中で、前節でも述べた「源頼朝御判物」と呼ばれる三点の文書については、かねてより『東浅井郡志』や滋賀縣史蹟名勝天然紀念物調査會（三輪菊三郎、柏倉亮吉らによる調査）等の研究報告によつて、その史料としての信頼性の薄さが指摘されており、筆者も現物を見た観点から、その花押の形状や書かれてある文言等についての若干の疑念を払拭し得ない。従つて今回の検討からは、これら三点の文書を除外した上で上記の考察を進めて行きたいと思う。

さて、問題の「大吉寺縁起」であるが、これを含む大吉寺文書十五点は、破損が著しい等の理由から現在一般に公開されておらず、先代の住職によつて撮影された写真版と、『東浅井郡志』等に収録された翻刻文によつてその全体を見るに留まつている。

滋賀県が昭和九年（一九三四）に発行した滋賀縣史蹟名勝天然紀念物調査會の報告書『史蹟』第六卷の「大吉寺址」の項によると、「大吉寺縁起」は「天地一尺二寸、面には金銀の貼紙を以て雲の形を散らしてゐる」とあり、その全文は以下になつてゐる。

天智天皇御宇、近江國愛智郡愛智河、有浮木似觀音像、流水入海随波、天平勝寶七年寄阿波津、頭沈水足出水、逮于百廿餘年桓武天皇御宇、微耻職位内心祈念、夢想有音無形、示云、有阿波津聖像海底為金耀、得夢告帝以參議兼兵部卿正四位下橘朝臣奈良丸遣彼津、有浮像（南山河未也）取上崇像、圓滿天願、故號天吉寺（育阿波津濱）其後經五十余年大同二季夏之比、大洪水流盈浮像高嶋大娘寄家女不生子誓云我有求願成就崇像、時夢像入胎、滿月生男、夫淺井治家至誠心經年序、大娘淺井東郡住草香部、有一禪侶、名安圓（延曆寺第四座主安惠和尚弟子）、與治家為師檀之間、語夫婦云、像於此東山久絶利潤滿月銜嶺四天仰光、慈雲出溪法界蒙潤、寂寥山上靈輻尤新、遠近人間感應隨願、竜門靈異、微妙揭焉是比觀音利生之地也云々、夫婦隨其言、舉此山拂



荊棘、削夷巖巔、建立堂塔、安置佛像、爾後貴賤男女、成就願望之故、世俗謂之惣吉寺、是故改號大吉寺、自爾以來、上下運歩、遠近競蹄、房宇並檐、僧侶多住、天臺第十八座主慈惠大僧正者、祈當寺乞子也、故以天元二季（歲次己卯）四月一日（己酉）、參上大吉寺、即三七日夜御修法、啓白導師大和尚阿闍梨、四王院十禪師延茂大法師、番僧四口、僧長朝、僧中修、僧住好、僧清金、各被物一領、御誦經信乃布廿端、導師楞嚴院十禪師松叡大法師、被物一領、當寺別當源信法師、被物二領、度者一人僧料供米三石、同月廿二日結願、其後恵心僧都、此山結草庵云々、而平治逆亂之時、源家零落之刻故右大將家（于時兵衛佐）隱居當寺之間、寺僧等奉扶持之處、稱謀叛之地、平家差遣追討使、被焼拂一寺畢、其時浮木之靈像、自飛出於炎中住立于雨墮、敢無有損壞、于時住僧阿願房法橋、奉肩之登巖畢、見聞之類感歎不少、一天靜謐之後、右大將家為大檀那、被建立堂舍等、九郎判官義經為奉行、被送付造營祈米等云々、仍本堂虹梁稱大檀那奉載彼御名字畢、於塔婆者、追可有御建立之由被成御教書畢（以下闕文）<sup>19)</sup>

このように「大吉寺縁起」は、後半部分が欠落している事からその成立年代を大枠でしか捉えることができないのだが、先述の滋賀縣史蹟名勝天然紀念物調査會の報告書は、この文献は書体等より見て室町幕府後期頃のものであるとの判断を下しており、また野瀬在任の郷土史家小林善次郎氏は、この文書を一五五〇年前後（天文十九年頃）のものであると位置付けている。ここでは「大吉寺縁起」の成立年代に関する先学の研究成果を参考にした上で、大吉寺文書の中から「大吉寺縁起」に先行して成立したと思われる文書を中心に検討を進めて行きたいと思う。大吉寺文書のうち、年代の特定が可能でなおかつ「縁起」に直接関連する記載の見られる文献は四点ある。そのうち最も古いとされているものは弘安八年（一二八五）五月日の勧進沙門覺道による「一切經安置祈願文」である。そして以下暦應元年（一三三八）十月日の「大吉寺勸進状」、応永廿九年（一四二二）の一寺衆徒等による「大吉寺諷誦文」、そして享祿二年（一五二九）の「大吉寺造営疏」となっている。これら文献のうち、第一点目に挙げ

た「一切經安置祈願文」については、大吉寺中興の祖とされる覺道上人が「令安置一切經於當寺、奉祈華夷靜謐御祈願狀」として記したものである。この文書に關しては、古大吉寺本堂跡とされる場所の東側付近に「覺道上人入定窟」と見られる遺構が残されており、そこに覺道上人が唐に渡つて一切經を持ち帰り、大吉寺に納めた旨が銘文として刻まれている事からも、當時の文獻としてかなり信賴のおける史料であらうと考えられる。以下にその内容を記す。

近江國大吉寺勸進沙門覺道敬白

請殊蒙十方檀那廣大助成、令安置一切經於當寺、奉祈華夷靜謐御願狀

右當寺者

天智之聖朝江州愛智河之水上、有木形之似聖觀音之像、桓武之御宇、同國阿波津之海底、有金耀之示御夢想之告、因茲遣勅使被見之、有靈像表奇瑞、昔殷朝夢賢相而致世治之明政、今和國夢佛像而滿天願之歡念、則為安彼世尊之像、被建此天吉之寺、大同二年九夏之天、鴻水漲來、懷山襄陵鴈宇流失有名無跡、上侶各悲下民其憂而浮像出於逆流聖容寄于高嶋、利生日新而遠近歸依心之思彌切、弘誓海深而波浪不能沒之願早甄、於其有止住之門名安圓、有結緣之檀那號治家。各廻兩人之丹誠、欲飭一堂之華構、今占淺井郡之邊土、新立大吉寺之甲區、東望則有雲嶺之聳、如翫常在靈山之莊嚴於心中、西顧亦成日想之觀忽縮十萬億土之依正於眼前、觀與天之自然妙有寔是地之奧區神秀者歟、盤折到山巔、誰謂有嚴窟則觀音利生之地也。大乘相應之所也、多年歸敬之輩、皆離惡趣、一度豫參之人、早成所願之誰不運歩、知之誰不致誠哉、然間斯寺雖有數ヶ宇之堂舍、覺道歎無一切經之安置、仍偏憑檀越之結願、欲遂渡唐之宿望、不知凌万里波濤令到他州、又不知失一期之運命、不歸本朝、若歸本朝全使者、今生則得為大願成就之人、若亦於他州令没者、來世尚得為此願勸進之身、死生雖有悛時願行永無盡期、覺道自發願之始、併拋名利之心情、致廻向之信、普祈衆生之解脫、然而雖有渡海之志更無用途之力、

三方雖完、不可支、咒於半破乎、一鉢雖滿、不可罽、咒於屢空乎、只蒙十方諸施主之助成、可致吾寺一切經之安置、百川之導細流、則三千尺之煙浪淼漫、一簣之積撮土亦數万仞之雲峯嵯峨、此義之外又何憑乎、就中觀音薩埵垂跡之地也、蓮臺之來迎無疑、建久莫府助成之寺也、柳營之奉加有便、云恰云裕不可不信、凡厥各與一善之輩須成二世之願矣々々莫忽々々敬白

弘安八年五月

日勤進沙門覺道 敬白<sup>(2)</sup>

この「一切經安置祈願文」の記載内容と「大吉寺縁起」のそれとを比較するならば、先ずその共通点としては①天智天皇の御世に近江國愛智河にて觀音像に似た「浮木」があがつたとされる事、②桓武天皇の御世にこの「浮木」が靈夢よつて阿波津（現在の大津市栗津の地と推定される）の水辺で発見された事、③この像を一寺を建立して安置し、その寺院を「天吉寺」と號した事、④大同二年（八〇七）夏の洪水によつて像が流された事、⑤その後像が高嶋の地に流れ着いた事、⑥僧「安圓」を開山とし、「治家」を大檀那として現在の場所に大吉寺が創建された事、⑦大吉寺が鎌倉幕府（右大将家）の庇護の下にあつたという事、など大きく七つの点が挙げられる。

一方両者の相違点としては①「縁起」によると、阿波津で「浮木」が発見されたのは天平勝寶七年（七五五）の事であり、その際勅使として橘奈良丸が派遣されたという事、②「浮像」が高嶋の地に流れ着いた際、「縁起」の記載には「高嶋大娘」の懷胎伝承が加味されているという事、③「一切經安置祈願文」では高嶋の地に居た僧安圓が結縁の檀那治家と共に浅井郡に一堂を建てたのに対し、「縁起」では「高嶋大娘」の夫「浅井治家」が、旧知の「浅井東郡住草香部、有一禅侶、名安圓」に開山として「建立堂塔、安置佛像」をさせしめた事、等の点が挙げられるものと思う。

その他に「縁起」では、「一切經安置祈願文」の記述中には見られなかった様々な事項が現れる。例えば現在の山号である「寂寥山」の文字や、「慈恵大僧正」が天元二年（九七九）四月一日に大吉寺に参上したのをはじめ、

恵心僧都がこの地にて草庵を結んだ事など数多の高僧名僧の来山の様子、そして平治の乱における宇堂の焼失と鎌倉幕府（右大将頼朝）によるその後の再建の模様等がそれである。またその他に平治の乱において寺に火がかけられた際、「浮木之靈像、自飛出於炎中住立于雨墮、敢無有損壞」といった伝承が新たに書き加えられている点も注目される。

これらの類似点あるいは相違点について、「大吉寺勧進状」「大吉寺諷誦文」「大吉寺造営疏」の残る三つの文書の記述内容から検討してみると、先ず天智天皇の御世に始まる一連の浮木聖像にまつわる伝承については、細部を除きほぼ全ての文献が「一切経安置祈願文」のラインを踏襲している。ただ暦應元年（一三三八）の「大吉寺勧進状」では、本尊の「観自在尊靈像」を「自然自作尊体也」とし、天智天皇御宇第六年（六六六）丁卯に粟津邊に精舎を建てて安置し、これを「天吉寺」と號した事。桓武天皇の御世である延暦元年（七八二）壬戌に洪水によつて「水麗額宇上洗落天字上一点」され、それ以降寺号を「大吉寺」と改めた事。そして大同二年に再び洪水に襲われた後、貞観初年（八五九）に本尊が高嶋郡に流れ着き、貞観七年（八六五）に大吉寺が創建されたとする記述のある事などが、相違する点として注視される。しかしこれら三点の文献と前述の二点のそれとの開山伝承にまつわる最大の相違点は、多少のズレを含むものの「一切経安置祈願文」と「大吉寺縁起」に明確に見られた安圓・治家という大吉寺創建にまつわる二人の重要な人物の記述の欠落にあるものと思われる。

これについて検討してみるならば、仮に「大吉寺縁起」の成立が先学の示す通り室町幕府後期であるとするならば、最古である「一切経安置祈願文」との間に位置付けられると考えられる三点の文献が、安圓や治家の名を欠落させるのは一見不自然なようにも思われる。しかし三点の文献のうち暦應元年の「大吉寺勧進状」はその文書の性格上、開山伝承といった記述に重きを置いた構成になり得ない可能性があり、また「大吉寺諷誦文」についても、先の「大吉寺勧進状」を受けた形で書き表されていると考えられる事から、その記述に追隨せざるを得ないとも考

えられる。また「大吉寺造営疏」についても同様の可能性が考えられる。

ちなみに現在の大吉寺において、その開祖と定められているのは「安然上人」で、その際の大檀越は「浅井治家」であるとされている。<sup>(24)</sup> このうち安然上人については、当時の天台僧に安圓なる名が見当たらず、また一方で「安然」が円仁―遍照と続く法統を受け継ぎ、元慶八年（八八四）に遍照の後を受けて元慶寺座主になり、『金剛峯閣一切瑜伽瑜祇經修行法』を著すなどの優れた業績を遺している高僧である事、<sup>(25)</sup>『續群書類從』所収の「慈恵大師傳」の中に「師諱良源、姓木津、近州淺井郡人也、郡有寺、曰大吉、安然和尚創業之地、而有從湖所湧出之觀音靈像」といった記述が見られる事などから、この安然が所謂安圓を指し示すのではとの解釈が行われたものと考えられる。<sup>(26)</sup>

むしろ本論の問題点としては、「一切経安置願文」に大吉寺の開創として記載された安圓―治家の関係が、続く「大吉寺勸進状」や「大吉寺諷誦文」、そして「大吉寺造営疏」らの文言の中に組み入れられず、それよりも後代の作とされる「大吉寺縁起」の中に、やや形を変えながら再び登場した事にあるものと思われる。そこで次に「大吉寺縁起」の記述様式について検討を加えてゆきたいと思う。

寺社縁起の類型化について、歴史的縁起と物語的縁起、そして補足として密教的縁起の三つの分類方法を示したのは五来重であるが、その説を借りるならば、この「大吉寺縁起」は恐らく歴史的縁起の範疇に含まれるものと思われる。確かに「而平治逆亂之時（中略）平家差遣追討使被焼一寺畢、浮木之靈像、自飛出於炎中住立于雨墮、敢無有損壞」といった記述は、奇伝的な内容を含むものではあるが、これも後の鎌倉幕府との関わりを示す作為的文章と考えれば、縁起の全編はほぼ歴史的事象及び他の文献よりの採取によって成り立っている。殊に慈恵大師良源の名が現われる下りは、応永廿九年（一四二二）五月十日の「大吉寺諷誦文」に記されている「慈恵大師之誓願」、或は享祿二年（一五九二）正月日の「大吉寺造営疏」における「慈恵大師之誕育勝地、座主僧正之練行靈窟

也<sup>(28)</sup>」といった文言からの採取と考えて良いであろう。また「縁起」にのみ見られる「参議兼兵部卿正四位下橘朝臣奈良丸」の名についても、『興福寺官務牒疏』の「大吉寺」の項における「然後桓武帝延暦九年橘朝臣奈良麿本願也<sup>(29)</sup>」といった文書を参照したものと考えられる。つまり「大吉寺縁起」には、様々な寺の歴史の変遷過程が靈驗功德より以上に盛り込まれているのであって、この点こそが「縁起」の成立を解き明かす上での手掛かりになるものと考ええる。

寺社縁起の変転は、その存立基盤であった莊園制の崩壊とともに始まり、経営の根本を勧進に依存せざるをえなくなつた事にある、とするのは五来重である<sup>(30)</sup>。これに関して桜井徳太郎は「特定の寺院の縁日とか法会の施行の際に集まり来る檀越や信徒に対し、この寺の靈驗を説くという具体性が何よりも必要であり重要であつた」とし、縁起が個々の寺院における開創の靈異や効験の歴史を具象的に解説しなければならぬ必然性について述べている。そして桜井はさらに、この点にこそ縁起の在地性や土着性、そして個別性が強く滲み出てくる理由が伏せられているとの見解を示している<sup>(31)</sup>。

「大吉寺縁起」は、歴史的信憑性に裏付けられているという以上に、地域の実情を巧みに捉えながら成立していった事は容易に想定できると思われる。またこうした歴史的背景が後世の大吉寺及びその周辺に対して、放生会などの機会を通してかなりの影響を相互に与えてきたものと考えられるであろう。

#### 四、「大吉寺縁起」成立の背景

では最後に、「大吉寺縁起」がどういった時代背景の下において書き記されたのかという問題について、筆者などの類推を行つてみたいものと思う。

先にも述べた様に、年号月日と作者の記述が見られない事を除くと、「大吉寺縁起」は他の四点の史料と比べて

も際立つた特徴があるという訳ではない。むしろ大吉寺の開山にまつわる伝承は、最古とされる「一切経安置祈願文」の内容を大筋において踏襲しており、また一方で他の三点の文献から慈恵大師と大吉寺との関連性についての記載を拾いだしもいる。そして平治の乱による堂宇焼失から鎌倉方による再建に至る様子については、縁起関連の文献中最も充実した内容が記されているのもまた事実である。ところが「大吉寺縁起」には、本尊である観音像の靈驗を示す文言が、他の文献に比してやや少ないかのように受け取れるのである。つまり「大吉寺縁起」を除く四点の史料が（開山縁起↓観音の靈驗↓勸進の趣旨）といった展開を中心に書き記されているのに対し、「大吉寺縁起」では（開山縁起↓慈恵大師以下の高僧伝↓鎌倉との関わり）といった大吉寺にまつわる歴史の変遷の過程を、それぞれの事象について整合性を持たせながら書き綴っている。

そしてもう一つ注視する必要があると思われる事は、「縁起」を含む「大吉寺勸進状」以降の文書中には大吉寺と室町幕府との関係が全く記されていないという点である。

大吉寺に対しては、観応二年の「足利尊氏祈禱状」を始めとして、以降義持・義教・義政・義材らの足利將軍並びに連枝によって、感状や祈禱状など都合七通の文書が発給されており、將軍家が大吉寺の大壇那であった事は十分に考えられるものと思う。先にも述べたように「大吉寺縁起」の記述形態は歴史の変遷を押さえながら進められているのだが、それにもかかわらず当時室町幕府と緊密な関係にあったと思われる大吉寺が、その縁起の中に関連する記載を行わない事に対しては、当然疑問が生じる。

ここで可能性として考えられるのは、「大吉寺縁起」の成立年代が従前より言われているよりもさらに古く、ちょうど「縁起」の記述が途切れる鎌倉期あたりまでしかのぼれるのではないかという事であろう。しかしながらそれでは五点の文書中最も多彩な内容を持つ「縁起」の記事が、「勸進状」「諷誦文」「造宮疏」が書き著される過程でほとんど無視された事になってしまい、何よりも鎌倉期から室町中期にかけて將軍家という安定した後援者を得

ていた大吉寺が、縁起を作成して自らの存在を世に主張せねばならない主体的な意義付けが見出せなくなってしまうのである。

以上の点から、「大吉寺縁起」の著された時期は五点の文書中最も後代に位置付けられるべきものと考えたい。そこで次に、「縁起」の成立する背景について考察する必要があるものと思う。

先に述べた足利家発給の文書は、結局延徳三年（一四九一）の足利義材の祈禱状を最後に途絶えてしまう。そしてそれ以降の大吉寺の趨勢としては、享祿二年（一五二九）の「大吉寺造営疏」に現れる「雖然作區之歳、南北兩郡為胡越之闘、（兩）佐々木作竜虎之諍砌、軍勢既亂入寺中、兵火忽炎上佛閣」といった記述が当時の状況を指し示している。つまり幕府権力の衰退と近江国支配をめぐる両佐々木家の抗争激化といった情勢の中で、大吉寺がその存立基盤を次第に失いつつあったのではないかと考えられる。そしてさらに同文書では「求檀越」との文言が見られる事から、その後の大吉寺は足利氏に代わる大檀那を捜す必要に迫られたものと推察される。

こうした点を考慮した上で、筆者はこれらの文献が「一切經安置祈願文」から「大吉寺縁起」へと変遷してゆく過程において、開祖「安圓」の大檀那となつた「治家」の名が一旦欠落してゆき、今度は浮木流像による高島大娘の懷胎伝説を伴つて、その夫「浅井治家」が大檀那となつて文獻上に再登場した事に着目する。

「大吉寺縁起」の成立年代が室町後期であるとするならば、それはちょうど東浅井郡一带を中心として湖北地方に浅井氏が台頭し始める時期とほぼ一致する事になる。浅井氏は勢力範囲内に鎮座する有力な祈禱系寺院に対して親和的な態度で臨もうとしたらしく、例えば同じ湖北の地にある竹生島の「蓮華会頭役帳」には、永祿三年（一五六〇）と同六年（一五六三）に浅井下野守久政が、また同九年（一五六六）には浅井大市殿久松が、そして同十一年（一五六八）と同十二年（一五六九）には浅井備前守長政がそれぞれ蓮華会の頭役を受けていた事が記されている。<sup>33</sup>



前段において、大吉寺が頭役差定によって放生会と呼ばれる法会を営んできた事を述べたが、この差定圏が恐らくは浅井氏の支配地域であつたであらうと思われる田根庄一円だつたという事は、注視すべきであらう。残念ながら大吉寺の頭役差定の様子を記した『御行帳』には、慶長十三年（一六〇八）より以前の記載が無いために浅井氏時代の大吉寺頭役の様子について知る術はないのであるが、少なくとも浅井氏の支配下にあつたであらう田根庄において、頭役差定を行つていた祈禱系寺院の大吉寺に対し、浅井氏側から何の接触もなかつたとは考え難い。

中世期における頭役差定に関しては、萩原龍夫などがこれを寺社勢力が荘園に依拠するようになる段階の特徴的な所産と捉え、差定させる主体を荘園的な本所・本家の如きものと想定して、「それはやがて惣村や武士団の発展とともに、自主的なグループの中での互選のようなものになる」との見解を述べているが<sup>35</sup>、こうした見解の根拠となる事例については、例えば中国地方の守護大名大内氏による松崎天神社十月会に対する密接な関連性等の事例が報告されており、在地勢力がその領国経営浸透の手段として寺社の会式を利用した事は、決して希少な事象ではないと考えられる。

つまり足利氏の權威衰亡以降、新規の大檀那を求めていた大吉寺と、新興の在地勢力として東浅井郡一帯に勢力を拡大していた浅井氏との間には、利害の一致する土壤が形成されていたのであつて、「大吉寺縁起」の記述内容が、そうした背景を巧みに吸収しながら成立していった事は、ある程度の可能性を持つて想像できるのではないだろうか。

## 五、おわりに

以上、「大吉寺縁起」について、主にその成立の歴史的背景について若干の考察を試みた。史料数の不足という圧倒的な制約上、その論証にはいささか飛躍し過ぎる面があつた事は否めないが、頭役差定圏の展開、あるいは檀

越獲得の手段としての縁起といった視点から同文献を見た場合、「大吉寺縁起」が成立してゆく背景には、在地の情勢が色濃く反映されているのではないかと推測が成り立つと思われる。

本論は大吉寺という地方寺院の趨勢について、放生会と呼ばれる頭役差定による行事を一方の支柱としつつも、主に地域史的な観点からその史料分析を試みたものであるが、こうした当時の寺社をめぐる諸相は、他の多くの寺社縁起の成立する要因でもあったものと考ええる。

今後の研究の方向性としては様々な課題が挙げられるのだが、現在までも事例として民間にその残存を見る大吉寺の頭役差定制度と、これを中心として在地との密接な関係性を維持し続けた大吉寺の位置付けの変遷については、本論の趣旨である「大吉寺縁起」成立の背景を探る事によって、多少なりとも分析が可能になったと言えるのではないだろうか。

## 注

(1) 『信長公記』元龜三年七月廿四日条

(2) 野瀬は、現在では殆どの家が集落内に存立する浄土真宗光福寺の檀家であり、残りの家も湖北町馬渡にある浄土真宗光源寺の檀家である。従って大吉寺の信徒組織はこの門徒の人々によつて構成されている事になるのだが、野瀬の人々にとつてはそうした宗派の違いに対する違和感はあまり見られない。

(3) 『御行帳』には他に差定状の書式や祭儀の日程などが記されている。その内容は以下の通り。

御札覚

をもて書御祈禱

何村 尉

觀世音御頭人何右衛門 丈

毎年二月十日ニ指申候  
毎年二月三日ニ福牛印ニ付遣申候  
毎年二月二日ニ御動申候  
毎年御くじ取り日二月八日  
毎年御頭人余後日十一月下旬

(4)

『御行帳』には田根村の十二の字以外に小倉村・石橋村・竜岸寺村・大瀧村の名前が見られるが、これらは後にそれぞれ北野・野田・木尾の各村に吸収されており、現在はそれぞれの小字名としてその名残を見る。

(5) 田川・須賀谷の二カ字は、明治二十二年（一八八九

年）の市町村制の実施に伴って田根村に編入されたが、その前身は現湖北町伊部・丁野・河毛等を含む田川庄であつた事が知られている。

(6) 波久奴神社（萩野神社）の祭礼は毎年四月三日に執り行われ、先述の氏子團に田川を加えた十五の字が籤によつて交代で神輿渡御の役を果たす。

(7) 『興福寺官務牒疏』の大吉寺にまつわる記述は以下の通りである。

勘録興福寺末寺派社流記

官務並最勝院家配下領知分

近江國 八拾五所

(中略)

大吉寺 在同國淺井郡草野郷。號天吉山。

僧房五十七字

天智天皇六年、役氏入峰。然後桓武帝延曆九年橘朝臣奈良麿本願也。始天台宗。後一條天皇万壽元年。

秋篠寺靈圓僧都中興。自是為法相宗眞言兼宗。本

尊淳木觀音大士。

(中略)

波久奴神社 在同郡田根郷號萩野明神。

祭所大物主神。大吉寺鎮守。

社僧二人、神人七人。

(中略)

以上近江國之分也。

右所録興福寺派寺末寺社、為官務最勝院家所為領知。末代不可違失之旨、既被官符畢。誠希代格職、謹以奉行之永可拾定者也。

嘉吉元年次辛酉四月十六日、再被拾定置之。

(『東淺井郡志』卷四、及び『大日本佛教全書』八四寺誌部二所収)

(8) 『田根のおこない』（一九八八年 浅井町教育委員會）八頁等参照。

(9) 『北野神社文書』に見られる「山門西塔院釈迦堂閉籠訴訟條目」には、次の様に記されている。

一江州大吉寺領、田根庄田地者、仁治以來當知行之處、無謂畠山但州、文安元年以來押領之間、如元可被返濟之由、可有御成敗事。

(中略)

右愁訴雖端多存略、纔録十三個條而已。

文安四年七月十六

(10) 『久我家文書』所収の曆應二年（一三三九）四月廿四日「室町幕府引付頭人奉書」、康永元年（一三四二）十

二月廿一日「足利直義裁許狀」、康永三年（一三四四）七月一日「田根莊雜掌・地頭代連署和與狀」、康永三年

七月十七日「足利直義裁許狀」には、久我家の雜掌と地頭方の佐々木氏との間の貢納に関する争いの様子が記されている。

(11) 注(1)に同じ。

(12) 『新註近江與地志略』(一九七六年 弘文堂書店) 一〇

二九頁參照。

(13) 伏木貞三『史蹟大吉寺』(一九五九年大吉寺史蹟保存會)を參照のこと。

(14) 『東淺井郡志』には、虎姫地震の被害の状況を、即死三〇、負傷二七九、全潰家屋一〇六八、半潰二四七八、と記している。(『郡志』卷參、六六三頁參照)

(15) 虫供養については、大吉寺の僧侶が近在の農村を歩き回り、家々の玄關口にて「大吉寺虫供養」と言い、そのお布施を集めていたという。そして僧侶の回る範囲については、特に限定されていなかったとの事である。

(16) 大吉寺所藏の「源頼朝御判物」三点のうち、通称「虫供養文書」と呼ばれるものの内容は次の通りである。

虫供養毎年無懈怠

可被勤メ近江一國者不及

申六十余州老石ニ壱合宛

為料米寄附事猶以

山門太郎左衛門可申候如件

文治貳年

七月七日 頼朝(花押)

大吉寺本坊

(17) 五来重「寺社縁起の世界」(『宗教民俗集成六・寺社縁起からお伽話へ』一九九五年角川書店所収)三四頁參照。

(18) 桜井徳太郎「縁起の類型と展開」(『寺社縁起』一九七五年岩波書店所収)四五〇～四五三頁參照。

(19) 『東淺井郡志』卷四、及び「大吉寺址」(『史蹟』第六卷一九四三年滋賀縣史跡蹟天然紀念物調査會・滋賀縣)所収。

(20) 報告書では、「大吉寺縁起」の特色について「記すところ間々従前の記録になき説を傳へて、足利末の縁起によくみらるゝ弊をみせてある」(一〇八頁)と述べている。また「縁起」の文中に現在の山号である「寂寥山」の記述が新たに見られる事についても指摘している。

(21) 小林善次郎『歴史と伝承』(一九九三年)參照。

(22) 注(19)に同じ。

(23) 「大吉寺勸進状」の内容は以下の通りである。

近江國淺井郡大吉寺住侶等敬白  
請蒙十方檀那助成遂本堂造營状

右當寺本尊者、觀自在尊靈像自然自作尊体也、致潔信者必有感應、譬如明月之移水、成恭敬者定垂靈瑞、猶似寒聲之和霜、因茲昔自天智天皇御宇第六年丁卯、於粟津邊造立精舍、安置本尊号天吉寺以降、經一百十六年後、桓武天皇御宇延暦元年壬戌、洪水時、水灑額字上、洗落天字上一点、故改号大吉寺、其後經二十六年、平城天皇御宇、大同二年丁亥仲夏之候、又依洪水難、本尊堂舍流失、有名無跡、清和天皇御宇、貞觀初年、流寄高島郡在々處々、効驗靈瑞、不可勝計、同七年乙酉、就草野之荊幄、與柏原之草創、題額任桓武聖曆舊勅、号大吉寺、望東則雲嶺時而峨、浮陀洛山之粧遮眼、向西亦湖水湛而浩々、弘誓如海之說浮心、棲山之禽獸、皆為和光同塵之眷屬、

住海之鱗甲、悉結八相成道之遠緣、自爾以降、學侶繼跟、行法無懈、鎮致一天安穩懇祈、兼抽四海靜謐誠精、星霜雖舊、利生日新、爰建武初年閏七月十七日夜、有不慮之子細、伽藍及回祿、縱雖盡一寺之微力、猶難遂半作大功、然間任文治之例、以事由雖可言上當賢將、且欲預十方助成企一堂造營各寮住侶之懇願可蒙施主之合力、彼巨海深無底、不厭涓露之故也、太山高無極、不讓土讓之故也、半紙不可嫌、集之則可成大聖之居、一錢不可輕、積之亦可構高閣之基、然則奉加施與之貴賤結緣助成之道俗、清祈之露易凝、生前丹棘之願望悉滿、衆罪之霜忽憑、最後金蓮之來迎無疑、勉矣々々、敢莫忽諸仍奉唱如件  
曆應元年十月 日 大吉寺住侶等敬白

〔東淺井郡志〕卷四、並びに『史蹟』第六卷所収）

(24) 堀田弘道『寂寥山大吉寺』（一九八七年大吉寺信徒總

代）他参照。

(25) 村山修一『比叡山史』（一九九四年東京美術）他参照。

(26) 『慈惠大師傳』『統群書類從』所収。

(27) 『大吉寺諷誦文』の内容は以下の通りである。

側聞、本覺金口矣、駐教於万劫之今、末師玉趾焉、始基於千歲之昔、甘有漏之法味、凝無邊之方便、伏惟、江州大吉寺者、起天智聖代之觀心、忝慈惠大師之誓願、自爾以降、或本尊之奇特、或法事之紹隆、甄錄不遑、稱揚無隙、全其趣、而補其闕、正其違、而省其煩、方今忘建武之餘災、終今時之新造、經營數字佛閣、起立三重塔婆、請楞嚴院長吏僧正法印大和尚忠慶、為唱導師、且屈竜象

衆以為賓、安天人師以為主、定惠二翅翼、自演最上之儀、邪正一眞如、速斷諸衆之縛、加之、唄讚答律、疑簫笛琴空候、歌頌感神、微琵琶鏡銅拔、巫山夜雨絃中起、湘水秋波指下生、然則解波闌波提之窮愁顯摩訶摩耶之芳躅四夷降伏、芝草遍街衢海內艾安、鳳凰巢苑囿、几厥功德不限、利益有餘、稽首和南、敬白

應永廿九年五月十日 一寺衆徒等敬白

(28) 〔東淺井郡志〕卷四、並びに『史蹟』第六卷所収）  
「大吉寺造營疏」の内容は以下の通りである。

勸進沙門敬白

請特蒙十方檀那之助成、遂江州淺井郡大吉寺本堂造立供養之狀

夫以、鶴林霞昇、而二千餘回牟尼之梵風止韻、竜畢雲阻兮六十五億逸多之法雨未灑矣、幽山路遙、欲尋之道首絕而不示路、苦海浪高、欲凌之船師去而不渡舟、已生二佛之中間殊失四聖之依怙、仰九野蒼天而拭淚、不見可助人伏八挺董地而扣胸、無來可憐輩、因茲生死長夜、從冥入於冥煩惱巨海、從深沈於深爰在大悲薩捶称名施無畏、遊戲阿鼻顯大悲代受苦之利益、示現娑婆播難化必能化之導凡其五分法身之杉、恒返大悲之淚、十地圓滿之顔、將萎利生之思、故十号妙典、說急難之中施無畏、三藏釋義、述濁世末代名觀音、仍考當寺權輿、天智聖朝、江州愛智河之水上有古木、似聖觀音之像、桓武之聖代、阿波津之蒼海現金耀特夢々告、因茲被立勅使之處、顯尊容、表奇特、觀慮則安彼大士像建立此大吉寺、然則本尊觀自在菩

薩者、從海湧出之玉体、浮木变化之金容、靈驗日新、感

応年舊、加旃慈惠大師之誕育勝地、座主僧正之練行靈窟也、觀音妙 智力之惠風無邊、能救世間苦之慈雲廣大、

叩必答、如曉鐘待鉛花必臨、似秋月浮湖水、是以越山川而運步道俗雲集繁於雨、忘飢風而傾頭敬信風儀盛於市、

無緣慈悲、逗機如磁石吸鐵、有情拔苦、應物似琥珀收塵、大悲深重勝諸佛、大集經云、三世諸佛大慈悲、皆集一体

觀世音、決定業轉超餘聖天台釋曰、若其機感厚、定業亦能轉、或處畜生形、大定大智慧、令發菩提心或處阿修羅

濡言調伏心、令除驕慢習、疾至無為彼岸見、倩以、當山為体、後峙絶頂峨々崇山天幽林穹谷、前湛蒼波漫々直下

無底雲濤烟浪、對左悲願之源泉灌注雪三惑之塵垢、顧右弘誓之飛雲羅列渡六趣之迷徒雖然作謬之歲、南北兩郡為

胡越之闕、兩佐々木作竜虎之諍砌、軍勢既亂入寺中、兵火忽炎上佛閣、金殿玉樓和煙昇圓盖、丹柱素壁化灰散方

輿、悲而送居諸、歎而經年序、抑今時扣富士之門求檀越、隨肥馬之塵非頼戮力者梵宇建立、又何時時乎、夫堂舍功德者、天竺云伽藍、漢家云精舍、亦名金剛寶刹、三世諸

佛、以此處為堅固寂靜之依處故也、亦称寂滅道場、十方如来、於彼砌得阿耨菩提故也、致興造者、得七種功德、

加修理者、得多生延命依之轉短疏、宏契諸人富貴人不惜千金數玉、貧賤類不耻半錢一紙、欲預奉加施入者也、然

則現世安穩之室內、滿攘災招福之素願、後生善處之床上、感觀音來迎之紫臺、粗勸進之狀如件、

享祿二年正月 日

〔東淺井郡志〕卷四所収

(29) 注記(7)参照。

(30) 五来重「寺社縁起からお伽話へ」(『宗教民俗集成六・寺社縁起からお伽話へ』一九九五年角川書店所収)五九

頁参照。

(31) 注(18)に同じ。

(32) 『東浅井郡志』卷四所収。

(33) 竹生島の頭役差定については、竹生島所蔵文書の中に、

永祿三年(一五六〇)から嘉永六年(一八五三)までの

歴代の蓮華会の両頭人の名前を記した「蓮華会頭役門文

録」と、同じく寛永四年(一六二七)から明治四年(一

八七一)の間の、頭人の候補者となった者の名前を載せ

た「蓮華会門文綴」とが残されており、頭人の選定に至

るまでの様子を知ることができる。

(34) 浅井氏による田根庄比定地域の支配については、現在

までのところ明確にされてはいない。傍証史料としては、

やや時代は下るが延寶四年(一六七六)己九月廿三日の

「瓜生村申状」に「一田根庄と申者、村數十五村御座候、

淺井様御代迄、壹ッ高にて御帳壹本に御座候」との記述

が見られる事が注目される。

(35) 萩原龍夫『中世祭祀組織の研究』(一九六二年吉川弘

文館)七五頁参照。

(36) 貝英幸「周防國松崎天神社十月会と大内氏―頭役差定

をめぐる―」(一九九四年『芸能史研究』一二七号別

冊)参照。